

幼児の運動あそび教材に関する G ボールの活用法

— 小学校児童の G ボール活動を保育内容の 5 領域から捉える —

田 村 元 延

キーワード／幼児教育, G ボール, 運動あそび教材

I. 緒言

平成 24 年 3 月に文部科学省の幼児期運動指針策定委員会より幼児期運動指針が示された。その中で、子どもを取り巻く生活様式の変化に起因するとされる遊ぶ機会の減少が、子どもの心身の発達に影響を及ぼしていると指摘されている。こうした現状を改善するために「主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動」が重要視され、「多様な動きが経験できるように様々な遊びを取り入れること」「楽しく体を動かす時間を確保すること」「発達の特性に応じた遊びを提供すること」といった観点から遊びの環境を構成することが求められている。

さらに、幼稚園教育要領解説（文部科学省，2008）では、「幼稚園教育の基本に関連して重視する事項」の中に「遊びを通しての総合的な指導が行われるようにすること」と示されている。このことは、幼稚園教育要領の「ねらい」および「内容」で示されている「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の 5 領域から遊びの中で幼児が発達していく姿を捉え、発達に必要な経験が得られる指導を目指すものである。

こうした幼児期運動指針や幼稚園教育要領解説を受け、保育の現場では、運動あそびの環境構成を工夫し、幼児が楽しく主体的に体を動かせる機会を保障し、遊びの中で総合的に指導していくことが求められているといえる。

このような幼児教育での現状を踏まえ、G ボールという用具に着目した（写真 1）。G ボールは、大きな弾力性を有するボールである。この G ボールは、平成 20 年の小学校学習指導要領改訂に伴い、小学校学習指導要領解説・体育編における中学年「体づくり運動」領域の中で「G ボールに乗って、軽く弾んだり転がったりすること。」と例示された。G ボールを用いた体育授業に関する先行研究では、児童の内省調査として実施した形成的授業評価において「楽しさ」や「自主的学習」項目が高い評価を示し、児童の主体的な活動を促す可能性が報告されている（田村，2014）。さらに、児童の活動からは、バランス保持途中に意図的にボール上から落下するような事例が観察されるなど、G ボールに対する多様なかかわり方も見受けられる。このような活動は、バランスを崩し「眩暈」を遊んでいるようにも思われ、「イリンクス」（カイヨウ，1990）の体現とも推察された。こうした児童の活動から、幼児を対象とした場合にも G ボールは、「主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動」を引き出す運動あそび教材として活用可能であると思われる。

しかし、幼児を対象とした G ボールに関する研究は見当たらないのが現状である。そのため、既に実践が行われている児童の取り組みを「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の 5 領域から捉え、今後、幼児を対象とした運動あそび教材として活用方法を検討していく

必要があるといえる。

そこで、本研究では、児童のGボールに取り組む様子に着目し、その活動についての記録映像を基に「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の5領域から捉えることで、今後、幼児対象の運動あそび教材としてGボールを活用するための可能性を検討することを目的とする。

II. 研究方法

(1) 対象児童および対象映像

児童がGボールに取り組む様子を5領域から捉えるために、平成22(2010)年5月20日、27日、28日、31日にI県T市立K小学校中学年児童58名を対象に実施した4回の座位バランス測定(写真1および図1)映像を分析対象とした。この測定課題は、足を挙げてバランスを維持する課題(途中バランスを崩し身体部位が着床しても測定の継続を可能とした)であり、30秒間の着床回数を計測し、Gボールの静的バランス能力を測るために実施したものである。この映像を対象とした理由について、測定が進むに連れ、設定した課題とは異なる形でGボールとかかわり始める児童の様子が記録されており、児童のGボール活動を5領域から捉える上で有用な資料であると判断したからである。



写真1. 座位バランス測定課題

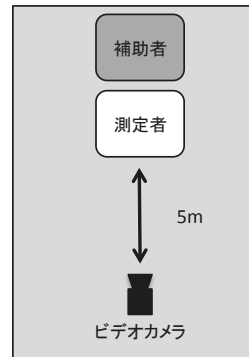


図1. 座位バランス測定映像

(2) 座位バランス活動について保育内容の5領域からの考察

児童が座位バランス課題に取り組む様子を保育内容の5領域から捉えるために、バランス保持途中にボールから落下する事例に着目した。これを「転び」とし、この事例を抽出するために「転び」の実態調査を行った。「転び」の定義として、Gボールでの座位バランス運動中にバランスを崩し、足以外の部位で着床した場合とした。これらの定義に基づき、「転び」を抽出し、方向(3方向:前,後,左右方向)および着床部位に着目して分類を行った。その後、分類された事例について代表的なものを連続写真として提示した。

このような調査で得た結果について保育内容の5領域である心身の健康に関する領域「健康」、人とかかわりに関する領域「人間関係」、身近な環境とかかわりに関する領域「環境」、言葉の獲得に関する領域「言葉」、感性と表現に関する領域「表現」の考察を行った。

Ⅲ. 結果

(1) 「転び」の実態調査

図 2 は、座位バランス課題測定中において抽出した「転び」の回数を測定回別に示したものである。座位バランス課題測定中の記録映像から抽出できた「転び」は、110 回であった。測定回ごとの「転び」の数は、1 回目が 11 回、2 回目が 14 回、3 回目が 40 回、4 回目が 45 回と測定 3 回目以降に多く出現する傾向がみられた。

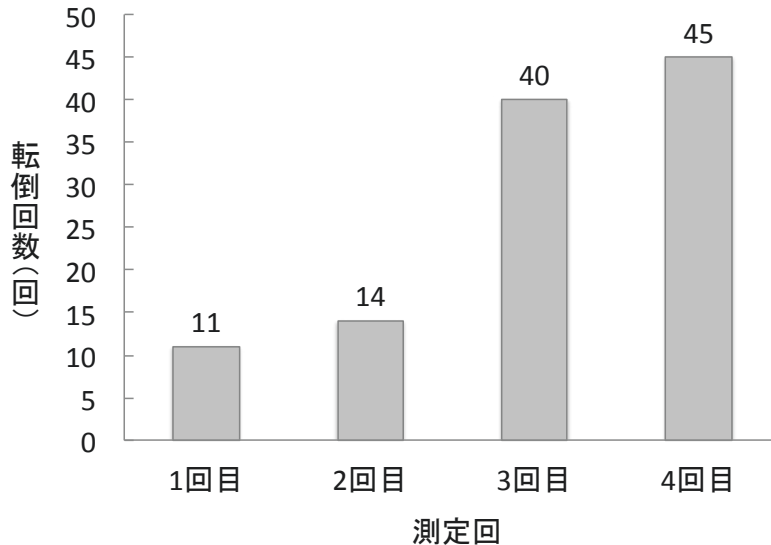


図 2. 座位バランス測定中における「転び」の回数

表 1 は、抽出した「転び」について、方向および着床部位に着目、分類し、その回数を示したものである。括弧内の数値は、回数の全体に占める割合を示している。

方向別における分類では、前方方向が 57 回 (52%) と最も多くおよそ半数を占めた。残りの半分は、左右方向が 29 回 (26%)、後方方向が 24 回 (22%) であった。

着床部位別では、手、臀部、膝からの着床が認められた。その割合は、手から着床した者は 64 回と、全体の 58% を占めていた。次いで臀部を着床した者は、30 回 (27%) であった。膝から着床した者は、16 回 (15%) であった。

これらを「転び」の事例としてまとめると、前方方向では手から転ぶ事例 (写真 2) が 25 例 (23%)、臀部 (写真 3) が 21 例 (19%)、膝 (写真 4) が 11 例 (10%) であった。後方方向では手からの転ぶ事例 (写真 5) が 14 例 (13%)、臀部 (写真 6) が 8 例 (7%)、膝 (写真 7) が 2 例 (2%) であった。左右方向では、手から転ぶ事例 (写真 8) が 25 例 (23%)、臀部 (写真 9) が 1 例 (1%)、膝 (写真 10) が 3 例 (3%) であった。

表1. 方向および着床部位に着目した転びの分類

	手	臀部	膝	合計
前方	25(23%)	21(19%)	11(10%)	57(52%)
後方	14(13%)	8(7%)	2(2%)	24(22%)
左右	25(23%)	1(1%)	3(3%)	29(26%)
合計	64(58%)	30(27%)	16(15%)	110

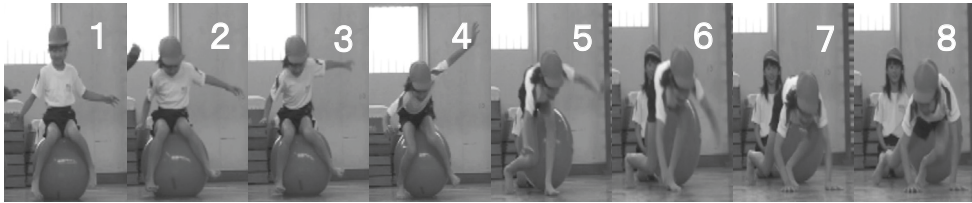


写真2. 前方・手から転ぶ事例



写真3. 前方・臀部から転ぶ事例



写真4. 前方・膝から転ぶ事例

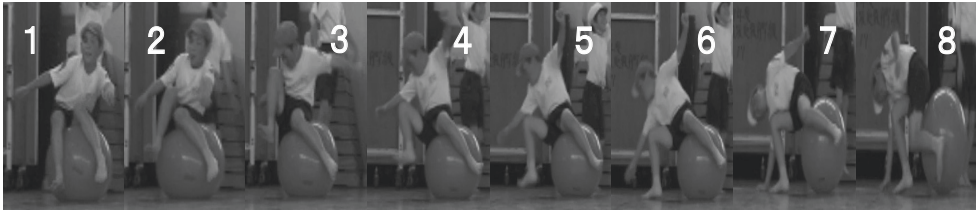


写真 5. 左右・手から転ぶ事例



写真 6. 左右・臀部から転ぶ事例

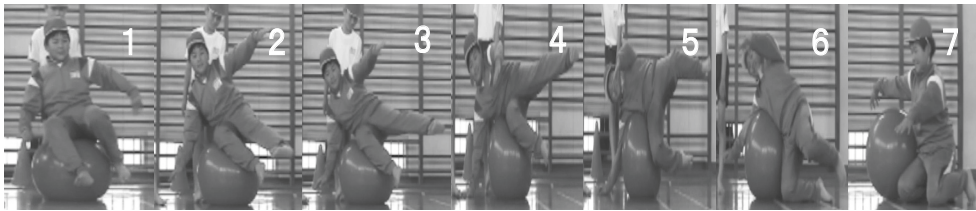


写真 7. 左右・膝から転ぶ事例



写真 8. 後方・手から転ぶ事例

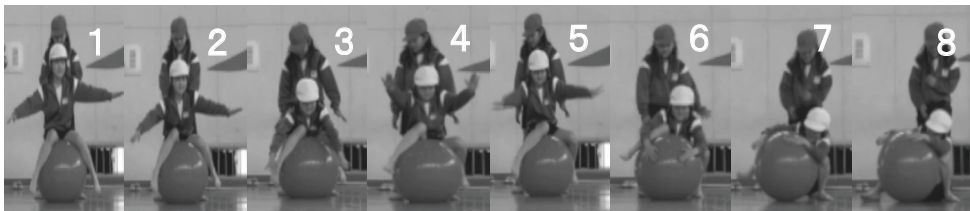


写真 9. 後方・臀部から転ぶ事例

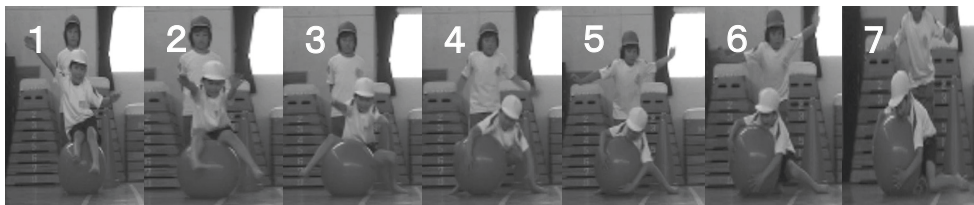


写真 10. 後方・膝から転ぶ事例

IV. 考察

座位バランス測定中に抽出できた「転び」は、110回であったが、その86%が測定後半に出現していた。実際の児童の活動を観察すると前半は、バランスを保持することに従事している様子であったが、後半では、意図してバランスを崩しボール上から落下するような児童が目立つようになった。意図的と感じる具体的な事例としては、「自ら足や手を極端に動かし、不安定な状況をつくる」(写真5, 6, 10)、「ボールから滑り台のように前方へ落下する」(写真3)、「測定終了のカウントに合わせて落下する」、「バランス中に目をつむる」などであった。こうした児童は、課題に慣れたことでバランスを維持することからダイナミックにバランスを崩す取り組み方に変化したのではないかと推察する。さらに、こうした児童の取り組みを幼稚園教育要領解説(文部科学省, 2012)における「環境」の領域から捉えてみると「(2)生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ。」「(7)身近な物や遊具に興味をもってかかわり、考えたり、試したりして工夫して遊ぶ」といった内容に関連すると思われる。特に「(2)生活の中で、様々な物に触れ、その性質や仕組みに興味や関心を持つ。」の内容の中で「幼児は、様々な物に囲まれて生活し、それらに触れたり、確かめたりしながら、その性質や仕組みなどを知っていく。初めは、感触を試し、物とのかかわりを楽しんでいるが、興味をもって繰り返しかかわる中で、次第にその性質や仕組みに気づき、幼児なりに使いこなすようになる。物の性質や仕組みが分かり始めるとそれを使うことによって一層遊びが面白くなるのが循環していく。」と示されているように、先に述べた児童の取り組みの変化は、不安定なGボールとかかわる中でその不安定さの仕組みや面白さに気づいた興味深い事例であると考えられる。さらに、Gボールの球形、大きさ、弾力性といった特性を活かした「環境」にかかわることで、「(2)いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。」

「(4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。」といった「健康」領域の内容にも繋がると推察する。

その他に、バランスが崩れた際やボールから落下する際に「手足を小刻みに動かす」「ボールを叩く」「ワー落ちるーと声を上げて落下する」といったパニック状態を表現している児童も見受けられた。こうした活動は「表現」の領域において「(8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなど楽しさを味わう」ことに関連すると考える。この内容の中で、「幼児は身近な環境から刺激を受け、その心の内にあるイメージを様々な表現している。」と示されている。児童が不安定という刺激を受け、自然に自らの状況を表現していたことは、この内容と関係する活動が展開されていた可能性が考えられる。また、ボールから落下する時のイメージを言葉として発している点で「(8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。」という「言葉」の領域内容とも関連していると思われる。

さらに、「隣の測定者同士と一緒に転がり落ちる」、「補助者におもしろい転がり方を見せる」といった様子も観察できた。これは、「人間関係」領域における「友達と楽しく活動する中で共通の目的を見いだし、工夫したり、協力したりなどする」といった内容に関わる活動であると考えられる。今後、幼児で用いる場合には、二人でひとつのボールを用いる環境や二人でバランスをとるといった環境を構成することにより「人間関係」の領域をより豊かに育めることが可能になると予想する。

このように児童の G ボール活動を 5 領域から捉えた一方で、バランスを崩す活動に夢中になるあまり、後方へ背部から転倒するなどの危険な状況も予想された。「健康」の領域では「危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する」という内容も含まれている。そのため、G ボールを幼児対象に活用する上での安全指導も十分に検討する必要があるといえる。

V. 結論

本研究では、児童の G ボールに取り組む様子に着目し、その活動について記録映像を基に「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」の領域から捉えることで、今後、幼児対象の運動あそび教材として G ボールを活用するための可能性を検討することを目的とした。

児童の G ボールでの座位バランス中の活動について事例的に考察を行った結果、児童が G ボールの球形、大きさ、弾力性といった用具のつくり出す「環境」にかかわり、パニック状態を「言葉」や動きで「表現」することや友達と落下することを楽しむ（人間関係）など多様に体を動かす（健康）状況が伺え、保育内容の 5 領域から捉えることができた。

このことから、幼稚園教育要領で示される「遊びを通しての総合的な指導」が求められている幼児教育において、G ボールを運動あそびの教材として用いることが可能であると思われる。また、「主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動」を行え「多様な動きが経験できる」といった幼児期運動指針に示されている内容に関する経験も保証できると思われる。

ただ、その一方でバランスを崩す活動がエスカレートすると怪我のリスクが高い状況が生まれることも予想された。そのため、今後は、安全管理および安全指導といった点でも十分に検討を行っていく必要があることもわかった。

VI. 今後の課題

本研究では、幼稚園教育要領解説を参照し保育内容の5領域から児童のGボール活動を捉えたのみであった。そのため、今後は、幼児期の発育発達特性の観点からも検討を行い、Gボールを幼児対象に活用するための知見を得ていく必要があるといえる。

参考・引用文献

- 正木健夫（2002）希望の体育学．農山漁村文化協会．
文部科学省（2008）小学校学習指導要領解説体育編．東洋館出版社
文部科学省（2012）幼児期運動指針．
文部科学省（2008）幼稚園教育要領解説．フレーベル館．
R. カイヨワ（1990）遊びと人間．講談社学術文庫．